

正しく知ろう、子宮頸がん！受けよう、子宮頸がん検診！



「子宮がん」ってどんな病気なの？

子宮がんは、がんのできる場所により、子宮頸がんと子宮体がんに分類されます。この2つのがんは、発症しやすい年齢や要因、また、自覚症状も異なります。

	子宮頸がん	子宮体がん
がんのできる場所	子宮の入り口である「子宮頸部」の表面から発生する。	子宮の上部にあたる「体部」の内膜から発生する。
発症しやすい年齢	30代～40代に多い。 近年、20代～30代で増加傾向にある。	50代～60代に多い。
発症の主な要因	主に、性交渉で感染するヒトパピローマウイルス(HPV)が関わっている。性行動の活発な若い世代にHPV感染が増えているため、20代から増加傾向にある。	主に、エストロゲン(子宮内膜を厚くする女性ホルモン)が関わっている。エストロゲンに長期間刺激され続けると子宮内膜がぶ厚くなり、発生しやすくなる。
初期の自覚症状	ほとんどない。	不正性器出血(一過性の少量出血、閉経後の出血など)。

☆ Check Point ☆

- ・子宮頸がんは、不正性器出血などの自覚症状がほとんどないので、定期的な検診が重要です！
- ・自覚症状がある場合は、すぐに医療機関を受診しましょう！



「子宮頸がん検診」ってどんな検診なの？

子宮頸がん検診は、以下のような検査です。検診は自覚症状がない方が受けるものですが、子宮頸がん検診の問診の結果、最近6か月以内に、不正性器出血(一過性の少量出血、閉経後出血など)月経異常(過多月経、不規則月経など)、褐色帯下のいずれかの症状のあった方に対しては、医療機関の受診を勧めたうえで、子宮頸部の細胞診とともに、子宮体部の細胞診を実施することについて本人が同意する場合は、併せて、子宮体がん検診を実施します。

【子宮頸がん検診】

◆ 対象者 : 20歳以上

* 一般的には性交渉の経験がある方が対象です。性交渉の経験のない方は検診前に医師に相談してください。

◆ 受診間隔 : 2年に1回

◆ 検査項目

- ・問診: 検診受診歴、妊娠・出産の経験、生理の状況、自覚症状などをたずねます。
- ・視診: 腔鏡を挿入して、子宮頸部の状況を観察します。
- ・内診: 腔に片方の手の指を入れ、もう片方の手で腹部を 押さえて子宮、卵巣、子宮近辺を触診します。
- ・細胞診: 子宮頸部の細胞を綿棒などでこすって採り、顕微鏡で調べます。細胞採取は数分で終わります。軽い痛みを伴う場合や、微量に出血する場合があります。

※視診、内診、細胞採取は、診察台で医師が行います。

☆ Check Point ☆

<検診前> 生理中の受診、前日の性交は避けましょう。

<検診後> 検診後の出血は1～2日で治まります。出血が数日続くときは医療機関を受診しましょう。



検査結果はどう読めばいいの？

検診の結果は主に以下のように通知されます。結果によって、適切な対応をとりましょう。

検診結果	結果の内容と対応
陰性	<ul style="list-style-type: none"> ・細胞診では、異常が認められませんでした。 ・自覚症状がなくても2年に1回は子宮頸がん検診を受診しましょう。 ・細胞診では、稀に正しく判定ができない場合があります。結果が陰性であっても自覚症状がある場合は、早めに医療機関を受診しましょう。
要精検	<ul style="list-style-type: none"> ・精密検査の必要があります。 ・確定診断のため、検診結果通知書と健康保険証を持参し、医療機関で精密検査を受けてください。
要再検査	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の検診で採取した細胞では、明確な判定ができませんでした。 ・再度、検診を行う必要がありますので、検診実施機関に相談してください。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・子宮頸がんでない他の疾患の疑いがあります。 ・早めに医療機関を受診しましょう。

☆ Check Point ☆

- ・「要精検」であっても、必ず「がん」であるわけではありません。むやみに怖がらず、精密検査を受診しましょう！
- ・精密検査では、コルポスコープという拡大鏡で、子宮頸部の粘膜表面を拡大して調べる「コルポ診」や組織の一部を採取して調べる「組織診」を行います。
- ・子宮頸がんは、精密検査により、「前がん病変」という「がん細胞に進行する前の軽微な変化」を発見できます。この場合、全てががん細胞に進行するわけではありませんが、経過観察により、必要に応じて適切に治療を受けます。

精密検査の結果、がんが見つかったらどうすればいいの？

子宮頸がんは早期に発見し、治療すれば、9割以上が治癒すると言われています。また、早期であれば、子宮を残せる可能性が高まります。

子宮頸がんと診断されたら速やかに治療を受ける必要があります。子宮頸がんの治療は、手術、放射線療法、化学療法（抗がん剤治療）があり、組み合わせで行う場合もあります。治療を受ける際には、どんな治療があり、治療後は身体にどのような影響があるのか、どれくらい入院するのか等、よく確認するとともに、妊娠、出産はもちろんですが、仕事や生活のうえで大切にしたいことなど、自分の意向を主治医に伝えましょう。



～HPVワクチンのこと～

子宮頸がんの予防として、HPVワクチンの接種により、体内に抗体をつくる方法があり、ワクチンの接種により、子宮頸がんの発生に関わるHPV感染を約50～70%予防できるといわれています。ワクチンの接種にあたっては、有効性と副作用のリスクを十分に理解した上で、接種の判断をする必要があります。また、接種により子宮頸がんを確実に予防できるわけではなく、定期的な検診が重要であることは、言うまでもありません。

作成：愛知県保健医療局健康医務部健康対策課

配布機関名